

## Uターン就農・・・我が家の場合 (その1)

## 「マニュアルがありません！」

畑作農家（十勝・清水町）

森田 里絵

## ◆自称「道庁の星」でした！

昨年話題となった「県庁の星」という小説をご存じだろうか（桂望実著、小学館）。ある

県庁のエリート公務員が地元のスーパーに研修に出され、苦惱し奮闘する姿をユーモアたっぷりに書いたもの。この春、織田裕二さん主演で映画化もされた。

この小説では、「県庁さん」というあだ名で呼ばれる主人公が、民間の感覚から外れた言動で周囲から浮きまくってしまふ様子を面白おかしく描いている。自分自身の姿をみているようで、胸がぎゅんとして、ちよつと笑えなかった。

実は、かくいう私も「道庁さん」だったのだ。北海道庁で農政担当を中心に、一三年間公務

員生活を送った。実際は大して職場の「星」でも「花」でもなかったが、それなりのやりがいは感じて働いていた。

縁あって、同じ道庁農政部署で働いていた主人と結婚し、さまざまないきさつを経て二〇〇四年の春、主人の実家である十勝管内の清水町に、二人そろってUターン就農した。

就農当時は、「道庁さん」として数々の勇み足・失敗をやらした私。今は就農三年目で、農家としてはまだまだ未熟だが、ようやく自分たちの足元をしっかりとみられるようになってきた。反省の意味もこめてこれまでを振り返ってみた。

## ◆明治から続く畑作農家にUターン

私たちの仕事の場である森

## 森田 里絵 (もりた りえ) さん



清水町 農業

1968年 長崎県生まれ

京都大学農学部卒

1990年 北海道庁入庁

胆振支庁、道農政部、環境生活部などを経験

2001年 哲也氏と職場結婚

2004年 退職し、清水町でUターン就農

現在、経営面積 33%

栽培作物：小麦、ビート、小豆、大豆、手亡、ジャガイモなど

田農場は、明治時代にここ十勝の清水町羽帯（はおび）地区に入植し、農業を営んできた。

初代の森田小三郎氏は、明治四年に岐阜に生まれ、青年の頃にハワイに渡り開拓に参加した。そこで働き、ある程度の費用をためてから、日本に戻ってきて北海道で自分の土地を手に入れたという、フロンティアスピリットたっぷりの方だった。当時の苦労は、想像を絶するものだっただろう。

その後分家し、私たち夫婦で四代目。現在は借地を含め約三三畝（約一〇万坪）の農地で小麦、豆類、馬鈴しょ、てん菜の四作物を中心に義父、義母、夫、私の四名で耕作している。典型的な十勝型畑作専業農家だ。

私自身は、長崎県生まれ。民間のサラリーマンだった父親

の転勤により、福岡、兵庫、横浜などを転々とした。農家研修は行ったことがあるが、農業経験はゼロ。

まったくのゼロだった。

◆雪解け・・・「いも切り」から始まった

キーンと凍れる（しばれる）十勝の冬から、凍れが徐々に和らいできて春の足音がやってくる。

まず最初の作業は、「いも切り」。種いも用のいもを、芽の数一つ以上残るように、二個か三個に切っていく。義父母は目にも止まらない速さでどんどんと切っていく。一方の私は、いも一つといつまでもにらめっこ。まずは「芽」の場所がよくわからない。「芽」のよう  
で「芽」でない「なりふし」と



いも切り

個「に切るべきか、三  
個」に切るべきか・・・  
そこで悩んでしまっ  
た。

「何グラム以上を三個  
に切る、何グラム以下は  
二個にする、という決ま  
りはないんですか？」と  
聞いてみる。

「あつはつは。そんな  
ものあるわけないっ  
しょー」と笑われる。

「いっそのこと、全部  
を二個に切るか三個に  
切るか統一してしまっ  
た方がいいよ。」

「何言ってるんだーいもは小さ  
いのから大きいので、いろい  
ろあるんだよー決められるわ  
けないべきー」とのこと。

確かに、種いもの大きさは千  
差万別。私は今まで規格がそ  
ろった「スーパーのいも」しか  
見たことがなかったのだ。

これまでは、必ず何かのルー  
ルかマニュアルに沿って働い  
てきた私。どうもすっきりしな  
い。しつこく、種いもを五〇個  
無差別抽出して重さを計り、平  
均値と標準偏差を割り出し、圃  
場の面積と植え付ける種いも  
の量などの要素を取り入れて、  
いったい何グラムに切れればよ  
いかを計算してみた。そして、  
平均が四〇グラムとなるよう  
に切るのが理想で、だいたい三  
〇グラムから五〇グラムの間  
におさめればよい、ということ  
を割り出した。試しに、義父母  
が切ったいもの中から三〇個  
を選んで計ってみると、なんと  
ほとんどがこの範囲内で、平均  
値もびったりと合っていた!!  
恐るべし。

### ◆「畝きり」(うねきり) が勝負

雪が溶け、土が乾いてくると  
トラクターが畑に入れるよう  
になってくる。トラクターで畑  
を起こし、整地した畑からはほ  
んわかと湯気が立ち昇り、幻想  
的な美しさだ。

さて、この時期に、男衆が張  
り切って取り組むのが「畝き  
り」作業。美しく耕した畑に、畝  
(うね)をつけていく作業だ。

昔は馬で畝きりをして、誰が一  
番美しいか競ったと聞いたこ  
ともある。馬がトラクターに変  
わったいまでも、畝きりの美し  
さを誇る気持ちはかわらない。  
当たり前だが、定規があるわけ  
ではない。では、どうやって直  
線を引くのか。私は最初見当も  
つかなかった。トラクターの速

いものもあり、逆にものすこ  
く小さい「芽」もあり、よくみ  
ないとわからない。大学で農業  
を勉強してきたはずなのに、ど  
うしてわからないんだ!と自  
己嫌悪。

なんとか芽の位置がわかる  
ようになつてきたら、次は二

度と作業機の抵抗を考えながら、目印を決めるとそれに向かって心静かにトラクターを進める。石にぶつかるなどのアクシデントがあっても、動じはいけない。ちよつとでも気持ち揺れると畝もゆがんでしまう。「オイ、曲がってるぞー！」という声でさらにひどく曲がったりするこ

も。「あー、あそこの畑は息子さんに替わったんだねー。最初は誰でもそつなのよ」と、まわりからはするどいチエックが入る。

「○○さんの畝の美しさにはかなわんなあ。」と誰もが絶賛する「畝ぎり名人」もいる。農家は常に互いの技術

を見つめている！

こうして、北海道を代表する景観の一つである、畑にとこまでもまっすぐ伸びる畝ができてあがる。これは農家の間で切磋琢磨の賜物なのだ。

もちろん、畝ぎりの美しさを競う理由は、「景観に配慮しているから」とか「芸術的だから」



畝切り

というだけではない。畝にゆがみがあったり、間隔に狭い・広いのムラがあると、その後の管理作業に影響が出てくる。カルチベーター（機械除草）を使うときも、間隔にムラがあると雑草だけでなく作物まで引っこ抜いてしまう。この等間隔の畝は、最も効率的で無駄を省いた形。だからこそ美しいのだ。

#### ◆「学歴」や「肩書き」は不要

このように書くと「なんでそんな細かいことを」と思われるかもしれない。でも、いわゆる「農業技術」というものは、ことういった細かな一つ一つの「熟練の技」の積み重ねであるのだ。それも自分の農場の土地にぴったり合ったものでなければならぬ。たとえ地味で細か

いことであっても、一箇所手を抜いてしまっただけで、出来秋が大きく変わってくることもあるのだ。農家に世襲が多いのも、こういった言葉にしづらい「技」を親と子の間ならば伝えやすいという感覚があるのだろう（もちろん個人差はあるが）。

この土地では「学歴」や「肩書き」はなんの意味もない。「学歴」や「肩書き」が何であつても、「これだけ美しく畝をきることができるか」そして「自分の経営をどう成り立たせるか」で、尊敬されるかどうかが決まる。他人の行動や自分の経験をもとに、技術をいかに磨くか。そこにマニュアルはない。前の職場とは全く違って、ある意味かなり恐ろしい。技の追求とは、実に奥深いものだ。